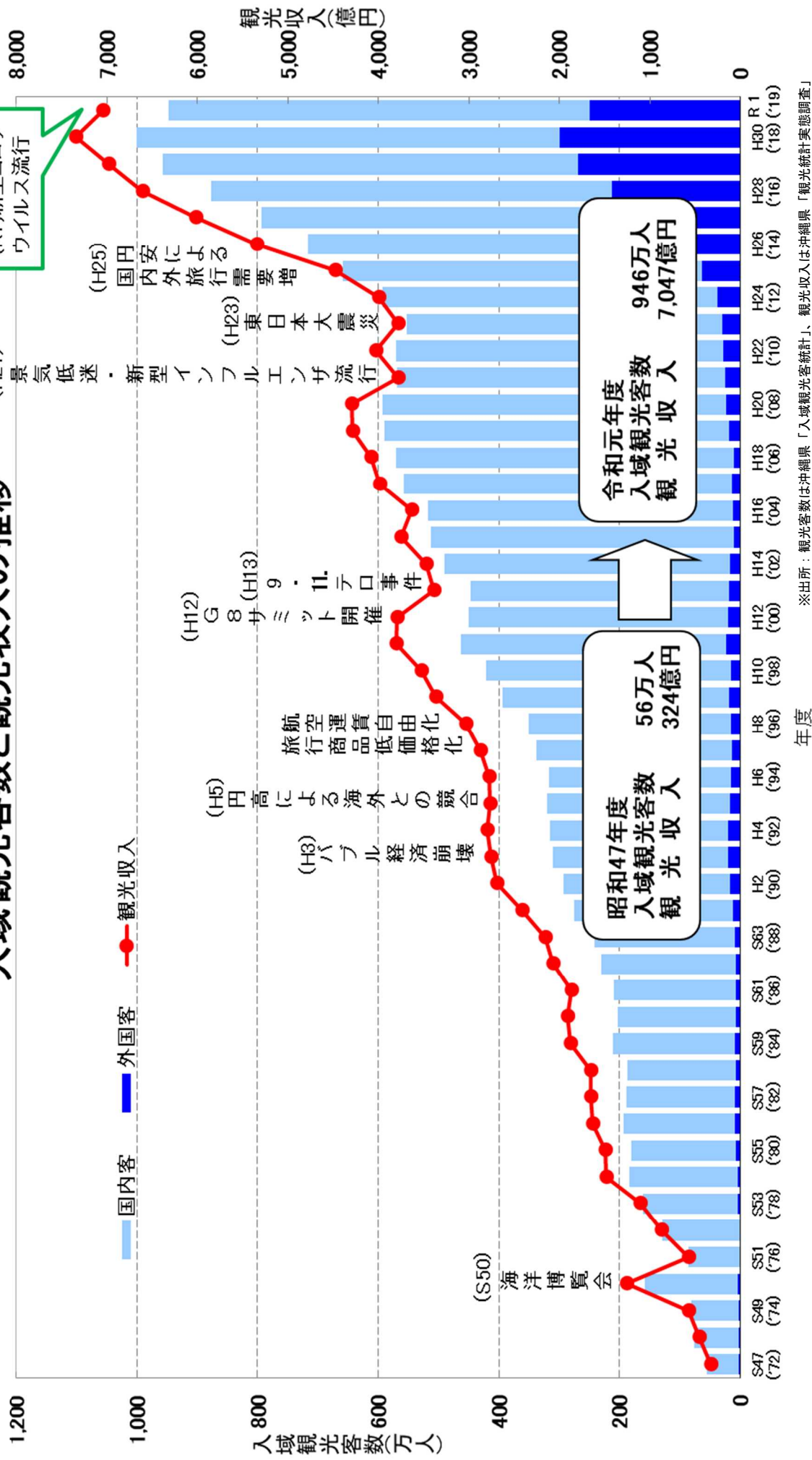


I 沖縄観光の概要

1 沖縄観光の推移 (1) 概況 (年度)

入域観光客数と観光収入の推移



※出所：観光客数は沖縄県「入域観光客統計」、観光収入は沖縄県「観光統計実態調査」
 ※観光収入は、平成17年度までは暦年の数値、平成18年度以降から年度の数値となっている。
 ※外国客には、特例上陸者を含む。

(2) 主なトピックス（年代別）

戦後～本土復帰	<p><慰霊訪問団(墓参観光)が中心></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本本土から沖縄への旅行にはパスポートが必要であった。 ・沖縄本土復帰(昭和47年5月)
本土復帰～1970年代 (昭和47年～昭和54年)	<p><海洋博を契機として、沖縄が観光地として定着></p> <ul style="list-style-type: none"> ・沖縄国際海洋博覧会開催(昭和50年7月) ・団体包括割引運賃制度開始(昭和52年～) ・航空会社が本格的な沖縄キャンペーン開始(昭和52年～)
1980年代 (昭和55年～平成元年)	<p><リゾートホテルの開業相次ぐ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2次オイルショック(昭和54年)や円高不況(昭和58年～62年頃)の影響を受けながらも、緩やかに観光客数増加 ・昭和62年に施行された総合保養地域整備法によるリゾートブーム
1990年代 (平成2年～平成11年)	<p><バブル景気後の伸び悩み期を経て、航空運賃の自由化や旅行商品の低価格化が進展したことにより急激に観光客数が増加></p> <ul style="list-style-type: none"> ・バブル経済崩壊(平成3年)→平成不況 ・首里城公園開園(平成4年) ・急激な円高による海外との競合(平成5年) ・1990年代後半頃から沖縄出身アーティストが躍進。沖縄への注目高まる。
2000年代 (平成12年～)	<p><世界情勢の影響を受けながらも、沖縄人気定着></p> <ul style="list-style-type: none"> ・沖縄県において「九州・沖縄サミット首脳会合」開催(平成12年) ・NHK「ちゅらさん」放映開始(平成13年) ・9.11アメリカ同時多発テロ事件の影響による風評被害 →「だいじょうぶさー沖縄」キャンペーン実施(平成13年) ・「沖縄美ら海水族館」リニューアルオープン(平成14年) ・SARS拡大、イラク戦争勃発。(平成15年) ・沖縄都市モノレール「ゆいレール」開業(平成15年) ・沖縄型特定免税店「DFSギャラリア・沖縄」オープン(平成16年) ・米州開発銀行(IDB)等年次総会開催(平成17年) ・本土復帰後の累計入域観光客数が1億人を突破(平成19年) ・金融危機後の世界的な景気後退の影響を受ける。(平成20～21年) ・新型インフルエンザの世界的流行(平成21年)
2010年代 (平成22年～)	<p><世界的な景気低迷、円高、各地の災害等により、厳しい状況となったが、官民一体となった取り組みにより回復し、観光客数が急増></p> <ul style="list-style-type: none"> ・美ら島沖縄総体2010開催(平成22年) ・東日本大震災の発生(平成23年) ・中国人観光客への数次ビザ発給開始(平成23年) ・本土復帰40周年(平成24年) ・新石垣空港「南ぬ島石垣空港」開港(平成25年) ・那覇空港「新国際線旅客ターミナルビル」供用開始(平成26年) ・慶良間諸島が国立公園に指定(慶良間諸島国立公園)(平成26年) ・那覇港泊ふ頭若狭バース「那覇クルーズターミナル」供用開始(平成26年) ・伊良部大橋開通(平成27年) ・沖縄県北部地域にやんばる国立公園を指定(平成28年) ・沖縄空手会館開館(平成29年) ・那覇空港際内連結ターミナル施設のオープン(令和元年) ・みやこ下地島空港ターミナルの開港(令和元年) ・首里城火災による正殿等の焼失(令和元年) ・クルーズ船寄港回数が過去最高を更新(令和元年) ・年間入域観光客数1000万人突破(令和元年)
2020年代 (令和2年～)	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症の世界的流行(令和2年) ・那覇空港第2滑走路供用開始(令和2年)